

トーマス・ウェードと漢語会話テキスト

－『語言自邇集』の言語観－

(二)

『語言自邇集』、『問答篇』、『三合語録』、『清文指要』、
『初學指南』の対照

Thomas Francis Wade and Chinese conversation textbook

(2)

by contrast with *Yuyanzierji*, *Wendapian*, *Sanheyulu*, *Qingwenzhiyao*
and *Chuxuezhinan*

藤田 益子*

(if@isc.niigata-u.ac.jp)

『語言自邇集』は、1867年にトーマス・フランシス・ウェードによって編纂された北京の官話のテキストである。それまで主流とされていた南京官話に対して、当時の英国外交官であったウェードが、ある種の必然性と意識を以って、『清文指要』系統の満漢合璧のテキストを基に編纂したものとされている。更に、この『語言自邇集』は明治以降、近代日本の中国語テキストに大きな影響を与えた本としても知られている。既に、「威妥瑪和汉语会话课本一从『語言自邇集』考察威妥瑪所追求的语言境界一(一)の『語言自邇集』、『問答篇』及び『清文指要』対照」において、ウェードの目指す大きな方向性については確認をした。しかし、実際には、『語言自邇集』、『問答篇』、『三合語録』、『清文指要』、『初學指南』という流れがあり、これらすべてのテキストを揃えることは、前段階では不可能であった。その後、関西大学教授内田慶市先生のご好意で、関係版本を確認させて戴くことが出来、今回は、これら五版本における語彙の異同と書き換えの原因の検証を行うこととした。このことから、更に複雑で様々な変更の要因が含まれていることが判明した。そこで、本稿では、対象版本を増やし、語彙の前面的な対照を行うことで、『語言自邇集』に至る各版本の中国語表現を整理し、編纂の過程を検証した。原稿の全体量が大部になるため、分割し、ここでは第一章のみを載せ、第二章以降は次に譲る。最終的には、ウェードの中国語に対する意識と『語言自邇集』の言語の性質について考察すると共に、現代漢語の基礎を構成する18世紀から19世紀にかけての北京官話の様相の考察を目指すものである。

* 新潟大学国際センター 准教授

キーワード：『語言自邇集』、『問答篇』、『三合語録』、『清文指要』、『初學指南』

目次

1. 満州語

- 1. 1. 呼称
- 1. 2. 因果関係を表す語句
 - 1. 2. 1. 順接の接続詞
 - 1. 2. 2. 因果関係
 - 1. 2. 3. 時点・時間
 - 1. 2. 4. “上頭”、“上”、“個上”の分類

1. 満州語

『語言自邇集』と『問答篇』において、それまでの資料から満洲語の影響の顕著な語を排除する傾向が見られる。次の二点において、この傾向がはっきりと見られる。

1. 1. 呼称

- ①満州語の呼称の排除
- ②“你訥”という二人称尊称の使用。
- ③“兄台”、“令郎”、“府上”、“你訥”などの丁寧な呼称表現や、量詞“位”の使用。

以下、具体的な書き換えの状況を示す。

①満州語の呼称を排除し、別の語に置き換える。

『三合語録』、『清文指要』、『初學指南』などの満漢合璧の資料に現れる呼称“阿哥”を、『語言自邇集』では“兄台”、『問答篇』では“大哥”と書き換えるパターンが最も多く見られる。

(回数は、『語源自邇集』のものに従う)

回数	『語言自邇集』 (1867)	『問答篇』 (1860)	『三合語録』 (1846)	『清文指要』 (1809)	『初學指南』 (1794)
5	兄台	大哥	阿哥	阿哥	阿哥
10					
67					
71					
83					
57					
94					

87					
86					
58					
53					
38					
58					
41					
44					
33					
23	兄台	大哥	阿哥	阿哥	×
70	兄台	大哥	阿哥	×	阿哥
70					

更に、『問答篇』では“哥哥”と変更する例も見られる。

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
1	兄台	哥哥	阿哥	阿哥	阿哥
7					
31					
20	兄台	哥哥	× ¹	阿哥	
37	兄台你知道麼	大哥你知道麼	阿哥你知道麼	阿哥你知道嗎	阿哥知道麼

しかし、『語言自邇集』では“兄台”、『問答篇』では“大哥”を用いていても、必ずしも、『三合語録』、『清文指要』、『初學指南』などの満漢合璧資料において、“阿哥”に対応しているとは限らず、二人称“你”が使われていることもある。

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
45	兄台	大哥	阿哥	你	阿哥
62	兄台	大哥	你	阿哥	阿哥
88	兄台	大哥	老長兄	阿哥	老長兄

また、『語言自邇集』では“老兄”に置き換えられることもある。

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
65	老兄	大哥	阿哥	阿哥	阿哥
62					
70	老兄	大哥	阿哥	×	阿哥
66	老兄	大哥	阿哥	阿哥	

『三合語録』、『清文指要』、『初學指南』などの満漢合璧の資料に現れる“阿哥”を『語言自邇集』では“老弟”、『問答篇』では“阿哥”、とするパターンが最も多い。『問答篇』で“大哥”、“二哥”とする例も見られる。

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
3 5 44 49 32	老弟	阿哥	阿哥	阿哥	阿哥
4	老弟	阿哥	×	阿哥	阿哥
45	老弟	大哥	×	阿哥	阿哥
44	老弟	大哥		阿哥	阿哥
62	老弟	二哥	阿哥	阿哥	阿哥

その他、『三合語録』、『清文指要』、『初學指南』などの満漢合璧の資料に現れる“阿哥”を、『語言自邇集』で、二人称である“你呐（哪）”とする場合がある。

この場合、『問答篇』においては、“哥哥”、“阿哥”、“你呐”など対応する単語にばらつきがあり統一性は見られない。

二人称尊称“你呐”については、内田（2006）の指摘にあるとおり、『語言自邇集』の中でも「談論篇」に49例、「續散語十八章」に1例、「問答章」に16例、「言語例略」に11例見えるが、「散語章」には見えないなど、各章間、各版本間に異同があることが既に指摘されている。

“你呐”への書き換えは、『語言自邇集』、『問答篇』のみに見られるものである。この語に関する研究は既に内田（2001）の第3章第6節「“您”にかかわることがら」で詳らかにされているので、ここでは、五種類の版本の異同についてのみ述べる。

“阿哥”、“阿哥你”などの語句から、“你呐”への書き換えには、次のようなパターンが見られる。『語言自邇集』、『問答篇』において、“阿哥”を排除しようとする意図が見られるが、その変換は画一的なものではなく、さらに『語言自邇集』と『問答篇』の間でも“兄台”、“大哥”、“那個人哪”など、不規則な呼称の差し替えが行われている。

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
1 1 68 68 11	你呐	哥哥	阿哥	阿哥	阿哥

20	那個人哪	阿哥	那個阿哥	阿哥	
30	你吶	大哥	阿哥	阿哥	阿哥
88	你吶	你吶	阿哥你	阿哥你	阿哥你
3	兄台	你吶	阿哥	阿哥	阿哥
69	兄台你吶	大哥你吶		阿哥你	阿哥你
73	兄台、老兄、你 吶	大哥、你吶	阿哥	阿哥	阿哥

また、“你”から尊称としての“你吶”への書き換えも見られる。

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
12	你吶	你吶	你	你	你
46					
10					
65					
34	你吶	你	你	你	你
82	你吶	你吶	溺	你	溺
46	老弟	你吶	你	你	你

その他の二人称の書き換え

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
73	府上	府上	你家	你家	你家

“老子”の書き換えバリエーション

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
42	老子	老子	老子	阿媽	老子
44					
99	他老子	他老子	他父親	他老子	他的老子

その他“阿哥”にかかわる書き換えのバリエーション

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
72	兄弟	兄弟	阿哥	阿哥	阿哥
11	兄台新喜啊	哥哥新喜啊	阿哥新年大喜啊	阿哥新年大喜啊	阿哥新年大喜啊
11	老兄長	老哥哥	老長兄	老長兄	老哥哥
82	吾兄	大哥	阿哥	阿哥	阿哥
27	我们家兄	我哥哥	我阿哥	我一个户中的阿 哥	我阿哥

37	我那個朋友	我那個朋友	我這個阿哥	我這個阿哥	我這個阿哥
87	兄台你這位令郎是第幾個的	大哥你這位令郎是第幾個	阿哥你這個孩子是你第幾個的	阿哥個的這個孩子是第幾個的	阿哥你這個孩子是第幾個的
85		阿哥	阿哥	阿哥	阿哥
1	奉求的事情	求哥哥的去處兒	求老阿哥的去處	懇求老長兄的去處	求老阿哥的去處

その他の三人称の書き換え

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語錄』	『清文指要』	『初學指南』
7	姪兒	姪兒	我兄弟	兄弟	你兄弟
37	姪兒	姪兒	我叔叔	阿哥的兒子	我姪兒

敬称としての“令・・”を使った人称は、『語言自邇集』において見られる。

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語錄』	『清文指要』	『初學指南』
85	令郎	阿哥	阿哥	阿哥	阿哥
51	老弟你令兄的話	阿哥你哥哥的話	老弟呀你哥哥的話	阿哥你兄長的話	阿哥你哥哥的話

量詞の“個”から、“位”への書き換えは、『語言自邇集』、『問答篇』に見られる。

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語錄』	『清文指要』	『初學指南』
19	那位老弟	那位阿哥	那個阿哥	那個阿哥	那個阿哥

1. 2. 因果関係を表す語句

尾崎（1981；41-42pp）によると、「中世中国語のうち、特に元代から明代にかけて、中国語の方位詞“上頭”、“上”は蒙古語と関わりの深い資料の中で、蒙古語からの干渉・影響を受けながら、従来の中国語に見られない、原因・理由の意味を表すようになった。“上”は、よく、“因為”、“所以”の後について、“上頭”は、“（ ）～的上頭”、“因～的上頭”、“為～的上頭”などの括弧作りをしながら、それぞれ、原因・理由を表す手段の一部になっている」との説明がある。確かに、こうした用法は、満漢合璧資料である『三合語錄』、『清文指要』、『初學指南』において、因果関係を表す際に、“上頭”、“上”、“個上”などの語が多く見られた。

そこで、更に、詳しく対照すると以下のような傾向が見られた。

『問答篇』では、因果関係をはっきりさせるためか、“上頭”の前に“因（為）”を置いた

“因(为) 這上頭”の形が多く用いられている。『三合語録』、『清文指要』、『初學指南』においては、“因(为)”と“上頭”の併用は見られない。『問答篇』から、『語言自邇集』への書き換えの過程で、このような表現は相当数削除されていることが分かる。

また、“・・・上頭”を“・・・個上”、“・・・的上頭”を“・・・的上”に表すのは、『清文指要』のみで、その他四種類のテキストには見られない表現である。

1. 2. 1. 順接の接続詞

『三合語録』または『初學指南』、『清文指要』における“那上頭”、“那個上”、“・・・的上頭”が、順接の接続詞の役割を果たしているものがある。

これらの用法は、『語言自邇集』、『問答篇』においては、ほぼ省略されている。

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
43 51	×	×	那上頭	那個上	那上頭
43	×	×	那個上…	那上頭…	那上頭…
99	×	×	那上頭…	那上頭…	那上頭…
83	×	×	那上頭…	因此	那上頭…
9	×	×	×	×	那上頭…
39	×	×	…的上頭	…的上頭	…的上頭
95	×	×	…的上頭	…的上	…的上頭
48	×	×	…的上頭	…緣故	…的上頭
51	×	×	…的上頭	×	…的上頭
17	×	×	×	…的上頭	…的上頭
49	他本是個弱身子 又不知道保養過 貪酒色所以氣血 虧損了	本是弱身子又不 知道保養因為過 貪酒色所以身子 虧損了	起初甚麼壯身子 而且又不知道保 養貪於酒色胡虧 損的上頭…	原先是什麼強壯 身子呢還搭着不 知道養法進於酒 色混被傷損的過 失	本是弱身子而又 不知道養貪於酒 色胡虧損的上頭 …

1. 2. 2. 因果関係

1. 2. 2. 1. 弱い因果関係

『三合語録』、『初學指南』、『清文指要』における“上”、“上頭”に弱い因果関係が認められるものがある。

『問答篇』では、“因為這上頭”、“因為這麼着”などへの書き換えが行われ、『語言自邇集』では、省略が見られる。

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語錄』	『清文指要』	『初學指南』
48	×	因為這上頭	那上頭	那個上	那上頭
59	×	因為這上頭	那上	那個上	那上頭
84	我一聽這話	因為這上頭	那上頭	所以	那上頭
6	看他們這麼着	因為這上頭	那上頭	那上頭	那上頭
82	×	因為這上頭	那上頭	×	那上頭
21	×	因為這麼着	那上頭	所以	那上頭…
89	×	因為這麼着	所以	那上頭	那上頭
94	×	故此	那上頭…	那上頭	那上頭…
42	×	因為這上頭	想着這個	×	這上頭
43	×	因為這上頭	…的上頭	…的上	…的上頭
62	×	因為這個話上	×	這個話上	這話上
98	這麼着	因為這麼着	那上頭	加個上	那上頭
68	誰知…	因其…	…的上頭	…的上	…的上頭
37	×	因…的緣故上	…的上頭	因…的上	…的緣故上
48	×	因為這上頭	因為那樣	因為那樣	那上頭
48	×	因其那樣兒	×	×	因其那樣

35章の例では、弱い因果関係でありながら、『問答篇』で“因此”のように強い因果関係を表す語を用いている。そのため、『語言自邇集』では、この語を省略している。

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語錄』	『清文指要』	『初學指南』
35	×	因此	因此…的上頭	因那個上	因此…的上頭

やや弱い因果関係を示すもの

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語錄』	『清文指要』	『初學指南』
1	因為這麼着	因為這麼着	因此上	因此上	因那樣

21章の例は、『三合語錄』、『清文指要』、『初學指南』が“因此”を用い比較的強い因果関係を表すのに対し、『問答篇』では“因這上頭”、『語言自邇集』では“因為這上頭”を用いることで因果関係の表現が弱くなっている。

例：這一向、咱們那群孩子們、合着夥兒、開了耍錢傷兒了、方纔來、起誓發願的、必定叫我去、我不得空兒、你是深知道的、一會兒一會兒的差使、如何能定呢、而且王法很緊、儻若鬧出一件事來、把臉放在那兒啊。因為這上頭、惱就由他惱罷、我到底沒去。(彼が賭け事の店を開いたが、仕事も忙しいし、法律も厳しいので何かあったら自分の立場がない。そのことで、彼が私のことを怒るなら、好きにすればよい。私は、結局は行かなかった。)

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
21	因為這上頭	因這上頭	因此	因此	因此

27章の例には、強い因果関係が見出せない。しかし、『語言自邇集』に“因為”を用いている例外的な用法である。

例：因為這麼着、他很沒趣兒、我也再不學了。(そのようなことがあって、彼が恥をかいたので、私は二度とこういうことは習わない。)

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
27	因為這麼着	因為這上頭	從那上頭	從那個上	那上頭

1. 2. 2. はっきりとした因果関係

因果関係がはっきりとしているもの。

『三合語録』、『清文指要』、『初學指南』に“因為”、“因此”などの因果関係をはっきり表す語が用いられている場合は、その後『問答篇』を経て、『語言自邇集』に至るまで、“因為”、“因此”、“因”など因果関係を明確に示す語が用いられていることが多い。しかし、『三合語録』、『清文指要』、『初學指南』で“…的上頭”を用いている場合でも、因果関係がはっきりしている場合には、“故此”を用い因果関係を明確に表現している。

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
48	因	因	因	因為…的上頭	因為
85	因為	因為		…的上	因為
71	因其這個	因其這樣兒	因此	因此	因其那樣
45	故此	因為這樣故此	×	所以	因為那樣
75	故此	故此	…的上頭	…的上頭	…的上頭
74	故此	故此	…的上頭	所以	…的上頭

88章の例は、すべての資料で“因為”を用いており、強い因果関係を読み取ることができる例である。

例：就是這幾個奴才們、宰豬的宰豬、收拾雜碎的、收拾雜碎、那個都不費手呢、因為這個、纔沒有能殺打發人去請。(豚を殺してたり、内臓を片づけてたりして、お客さん呼びに言っている暇がなかったので、迎えに行かなかった。)

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
88	因為這個	因為這上頭	因為那樣	因為那樣	因為那樣

その他の例

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
90	×	×	×	那上頭	×
50	×	因其那樣		因此	因其那樣
68	×	因其那樣兒	×	所以	因其那樣
49	×	因其那樣兒	因那樣	所以那個上	因其那樣
37	×	×	因為那樣	因那個上	×
81	×	×	×	因這個上	×

1. 2. 3. 時点・時間

さらに、尾崎（1981・47pp）でも既に指摘されている、口語としてのテキスト類—満漢合璧—資料によく見られるという“上頭”による時点・時段の用法も見られる。

これらの用法については、『語言自邇集』、『問答篇』共に、『三合語録』、『清文指要』、『初學指南』で使われた“上頭”類の表現は削除され、“時候”などの時間表現に書き換えられている。

既に、『問答篇』の段階で、因果関係の“上頭”類との、使い分けを明確しようとした意図を窺うことができる。

回数	『語言自邇集』	『問答篇』	『三合語録』	『清文指要』	『初學指南』
27	那時候	忽然間	到此	那個時候	那上頭
70	那時候兒	那時候兒	那上頭	×	那時節
98	時候兒	時候兒	的上頭	的上頭	的上頭
43	往別處兒去的時候兒	往別處兒去了的時候兒	往別處去的上頭	往別處去的上頭	往別處去了的時候
97	×	×	…之際	…的上頭	…的上頭
56	×	×	那上頭	那個上	…那上頭
50	×	×	…的上頭	…時	…的上頭
48	×	×	…的上頭	…的時候	×
74	又搭着留我喫了一頓飯	又搭着留我吃便飯	又搭着給我晚飯喫的上頭	又搭着給晚飯喫	給我晚飯喫的上頭
40	…的時候兒	…的時候兒	…空兒	…的上	…的時候

1. 2. 4. “上頭”、“上”、“個上”の分類

これら、満漢合璧資料である『三合語録』、『清文指要』、『初學指南』における“上頭”、“上”、“個上”を大きく意味の上から分類すると、因果関係を表すものと時点・時段を表すもの二つに分けられる。この因果関係を表すグループを、原因と結果の相互関係の結びつき

の強さの段階に応じて、『語言自邇集』、『問答篇』では、さらに以下の四段階に分けて変換していることが分かった。

- ①「順接の接続詞として使われているもの」は、『語言自邇集』、『問答篇』共に語句が省略されている。
- ②「弱い因果関係が認められるもの」は、『問答篇』と『語言自邇集』では、書き換え方が異なる。『問答篇』では、“因為這上頭”、“因為這麼着”などへの書き換えが行われており、因果関係を認める書き換えである。しかし、『語言自邇集』では、因果関係を表す語句の省略が見られ、現代漢語の用法により近い解釈となっている。
- ③「因果関係をはっきり表す語が用いられているもの」は、『問答篇』、『語言自邇集』共に、“因為”、“因此”、“因”など因果関係を明確に示す語が用いられている。

時点・時段の用法については、『語言自邇集』と『問答篇』の間で大きな変化は見られない。共に、“・・的時侯”への書き換え、または語句の省略が行われている。

以上のことから、『語言自邇集』、『問答篇』においては、満漢合璧資料における“上頭”、“上”、“個上”の用法に複数含まれる意味上の区別を正確に解釈し、語句の上ではっきりとした使い分けを試みたことが推察される。

『老乞大』の版本間においては、明らかな相違が見られる。清代に改定された『老乞大新釋』、『重刊老乞大』の系統では、“故此”、“所以”、“因(此)”に書き換えられ、『舊本老乞大』、『翻譯老乞大』では、“因此上”、“为这(那)上”を用いる。

太田(1988, 249p)によると、“上頭”は『元秘史卷一』、『元曲』にも既に見られるという。

更に、“上”、“上頭”の用法は、清代北京白話小説『儿女英雄傳』にも見られる。例：“竟像他亲哥哥一般、也因这上头、他父亲才肯留奴才住下。”『儿女英雄傳』(14回) しかし、清代の白話小説『紅樓夢』には、この用法を見ることができない。

“上”、“上頭”因果関係を表す表現方法であるが、文の語句の後に用いられることからウラルアルタイ語系統の言語である満州語の影響を受けている可能性がある。実際に、『儿女英雄傳』の作者文康も満洲人である。また、“上”、“上頭”は、元代既に存在しており、『問答篇』にも存在する。しかし、『老乞大』の清代に改定された系統の漢字テキストの口語の中には、“上”と“上頭”は使用されていない。ここから、清末期の旗人はまさに満州語の影響から徐々に離脱したと見ることができる。尚且つ、『問答篇』において、“上、上頭”と“因为”共起する例が少ない。(特別に『問答篇』では多用され、一種の固定形式的用法となっている。)これらの用法は、漢語の語法から見ると些か^くどい^い表現である。威妥瑪が、『語言自邇集』において、“因为这上头”という言い方を基本的に排除した原因はここにあると考えられる。『問答篇』の“因为这么着”という表現は、古い用例“因为这么着”、“因此那樣兒”に沿ったものであり、近似した“因为这么样”という表現は『紅樓夢』に一例見られる。しかし、『儿女英雄傳』にはこのような用法を見ることができなかった。

(次刊：第2章続く)

<参考文献>

- 常嬴生 1993 『北京土語中的滿語』 北京燕山出版社
- 陳剛 1983 北京人对母親稱謂的演變 『中国語言』 第2期 (pp.51-56)
- 六角恒広 1998 『中国語學習余聞』 同学社
- 大田辰夫 1988 『漢語史通考』 白帝社
- 小野文 2005 ルイ・バザン『中国語口語の一般原理に関する覚え書』を読む 『惑問』 (pp.81-92) 近代東西言語文化接触研究会
- 尾崎實 1981 已然と未然：近代中国語における“上”“上頭”の用法から 『関西大学東西学術研究所創立三十周年記念論文集』 関西大学東西学術研究所編 (pp.41-56)
- 孫春芝 2001 英国公使威妥瑪與天津教案 『四川師範大學學報(社会科学版)』 (pp.94-08) 第2期28卷
- 高田時雄 1997 清代官話の資料について 『東方學會創立五十周年記念東方學論集』 (pp.771-784)
- 2001 トマス・ウェイドと北京語の勝利 『西洋近代文明と中華世界』 京都大学人文科学研究所70周年記念シンポジウム論集 (pp.127-142) 京都大学学術出版会
- 内田慶市 2000 “您”に関わることがら 『関西大学文學論集』 第50巻第2号 (pp.121-148)
- 2001 『近代における東西言語文化接触の研究』 関西大学東西学術研究所研究叢刊 17 関西大学出版部
- 2004 近代西人的漢語語法研究 『語言接触論集』, (pp.258-272) 上海教育出版社
- 2006 『語言自邇集』に関わることがら (pp.21-29) アジア文化交流研究 第1号 関西大学アジア文化交流研究センター
- 尹小紅 2002 從“滇案”的处理看晚清外交 『貴州師範大學學報(社会科学版)』 (pp.18-22) 第4期 總第117期
- 趙傑 1996 接触・轉換・練磨—清末民初の旗人の言語 『翻訳—異文化のインターフェイス—』 村田裕子訳 筑和正格編 北海道大学言語文化部研究報告叢書10 (pp.64-82)
- 2002 滿語對此京語音的影響 『北京社会科学』 第2期 (pp.21-23)

<这次使用的版本出版时期>

- 『初學指南』：乾隆五十九年（1794）
- 『清文指要』 2：嘉慶十四年（1809）重刻 三槐堂藏版
- 『三合語錄』：道光二十六年（1846）
- 『問答篇』：咸豐十年（1860）
- 『語言自邇集』 第一版：（1867）
第二版：（1886）
第三版：（1902）
- 『紅樓夢』（1792）
- 『兒女英雄傳』：同治（年代不詳）（1878）刊
- 『小額』（1908）

<注>

¹ 「×」記号は、それに相当する表記がないことを意味する。更に空欄は、版本が欠損しているか、もともとその文章の含まれる会話の内容自体がないことを意味する。

² 『清文指要』は『三合便覧』の一部である。『三合便覧』は、清の敬齋輯、富俊補、清乾隆四十五年（1780年）満漢蒙合璧刻本である。乾隆二十五年（1760年）初稿完成、その子、富俊によって、例が増補された。乾隆四十五年（1780年）に刻板印行された。内容は全部で三部に分かれ、巻一を第一部とし、“清文指要”、“蒙文指要”等を含む内容となっている。

なお、本稿は平成19年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）、「清朝の言語政策と社会変動に係わる漢語の多層性に関する研究—公用語の脈流を視座に—」、課題番号19520333）の成果の一部である。